

コラム

「ベトナムからの原子力受注を歓迎する」

客員研究員 新井 光雄\*

「案ずるより産むがやすし」といった諺がある。日本がベトナムから原子力発電所の受注に成功したというニュースを読み、聞きして、この諺を思い出した。なかなかいい言葉なのだが、そうそう使える機会がない。今回は是非にもつかってみたくなった。なにはともあれ朗報であり、あれこれ問題の多い民主党政権で、異論・反論を持ちながらも、これは評価したい。いや民主党の快挙と言ってもいい。UAEを韓国に、ベトナム一期はロシアに敗北、日本の掲げるインフラ輸出なるものはまたまた掛け声に終わるかの危惧があったから、今回の実質受注合意には正直驚いた。新聞に載るズン・ベトナム首相と握手する菅首相の笑みも素直に見ることができた。儀礼を超えた笑みと思ったが、思い過ごしでもないと確信する。

しかし、改めてよくぞこうも早期に、一気呵成に決着したものだ。原子力協定の方は輸出問題とは別にそこそこスムーズに進展するものと思っていたが、それが具体的なプロジェクト受注に結びつくかどうかは、問題ありで、相当に難しいというのが専門家筋の見方であり、大方が「期待はしているが具体化には難問ありすぎだ」という見方だった。「大丈夫。受注成功」と言い切った専門家は寡聞にして知らない。韓国の運転保証期間やらロシアの軍事支援など、日本として超えなくてはならない国家支援の壁をどうするか、その見通しが立たなかったことなどもあり、同じ諺でも「大山鳴動鼠一匹」になってしまうのかの心配をする向きが大半だった。

それが見事に受注だ。当然、当方も引きずられ成功確立は2、3割と踏んでいたのだが、見事にその予想がはずれ、今ははずれたことを恥じるより喜んでいる。この受注には野党の自民党なども異存あるまい。もし政権奪還ということになっても、引き継ぐことになるだろう。そもそも対ベトナム計画は自民政権時代にスタートし、自民党もそれなりに努力してきたのだから、よく成功に結び付けたと評価すべきだろう。双方で祝杯は挙げてもおかしくない。苦労話を話し合ってもいいのではないかとさえ思う。文字通り超党派の問題だからだ。

この問題の評価は経済的な側面で、日本に新たな稼ぎの手段ができたという意味合い、それとともに国内における原子力の位置づけの意味的变化を生むという点にもある。国際的な快挙の裏側、すなわち国内での原子力問題は一進一退の状況にある。本格稼働の相次ぐ延期に悩む六ヶ所。

「もんじゅ」のあれこれのもたつき。生みの苦しみの上関原子力など、問題は尽きない。問題の性格上、やむなしとする面も持つが、一方で不合理な問題に直面するという日本的な面も少なくない。常に引き合いに出される稼働率の低さなどは、その不合理性から出てくるもので、実はこれが日本の原子力の国際競争力を低めているという指摘もある。単純な見方をすれば、「どうして日本の原子力は事故が多く、稼働率が低いのか」という間違っただ疑問に繋がってしまう。もちろん、「それだけ安全重視」という反論はできるし、事実でもあるが、立地点の自治体の不合理、場合によっては横暴とも思える判断がある。こうした状況は変えていく必要があるのだが、自縄自

\* 地球産業文化研究所理事 元読売新聞編集委員

縛とも言える状況ができてしまい、解きほぐすことが極めて難しくなっている。

少し以前のことになるが、ベトナムからの訪日原子力視察団に講演を依頼されてやったことがある。視察団には原子力公社の幹部、政府幹部、メディア代表などがいて、原子力報道と日本の社会というようなテーマで話しをした。その後、懇親会があり、その時に指摘されたのがこの問題だった。安全協定のあり方など、社会的な仕組みの違いなど、説明に窮した。日本的な不合理を言葉で説明するのは至難。多分、ベトナムにしたところで違った形の不合理を抱えているのだろうが、説明を求められたのは当方。そんな反論には意味はない。売り込むのは日本だ。相手をあげつらってどうにもならないと思った。

確かに安全重視はひとつの価値。誇るべきだとも思うが、限度がある。なんとか滑り出したプルサーマルなどがその典型。原子力に反対するのが分らないでもないが、プルサーマルそのものへの反対は不合理きわまりないと素人でも思えるのだが、苦節十年を強いられてしまう。その経済的な損失はいかばかりか。

今回の受注成功はこうした面にいい影響を与えるだろう。与えなければならない。

もちろん楽観は禁物。目下の時代は油断ができない。状況の変化が激しい。きちんとした体制で具体的に動き出すまで、一瞬も気を緩めることはできない。受注の窓口になるであろう電力会社、原子力メーカーによる新会社は発足したばかりだ。まだ体制万全とは到底いえないとされている。混成部隊であることからくる齟齬もあると言われている。当然のことであり、問題なしのプロジェクトなどないから、神経質になることは全くないが、今後のインフラ輸出の試金石になることだけは確か。大袈裟に言えば日本の未来がかかってきている。「ベトナムに日本の原子力」は使命である。なんとしても成功させてほしい。

余談とも言えるが、日本の反原子力勢力がベトナムの反原子力の動きに情報提供などを行っているといううわさも出てきている。確証があるわけではないものの、国際化はこうした面があって当然で、驚くべきことではないのだろう。とって軽視していいというものでもあるまい。反対も自由である。阻止などできはしないが、承知はしておくべきと思う。

受注合意、大きな枠組みができたということで酔い痴れてしまっは、「九仞の功一簣に欠く」。確かに「産むはやすい」が育てるのは苦勞する。「終わりよければ全て良し」ともいう。是非そうなってほしい。

お問い合わせ : [report@tky.ieej.or.jp](mailto:report@tky.ieej.or.jp)